

Title	スリム志向社会についての考察
Author(s)	周, 典芳
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44163
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	周 典 芳
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 17478 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	スリム志向社会についての考察
論文審査委員	(主査) 教授 伊藤 公雄 (副査) 教授 木前 利秋 助教授 川端 亮

論 文 内 容 の 要 旨

2002 年の夏に、中国製の「痩せ薬」で死者が出たというニュースが世間を大いに騒がせた。このニュースの裏側に見えてくるのは、多くの女性が痩せるために健康を損なう危険を負っている姿である。

このニュースに呈示されたのは、現代社会において、一種のスリム志向とでも呼べる傾向が存在していることである。しかも、このスリム志向には、ジェンダーの 이슈が存在している。つまり、「スリム」を求めるのは、その多くが女性なのである。この一見当たり前のような社会通念の裏に、多くの女性が自分の体を苦しめて、過激なダイエットを実行し、健康を壊す危険を背負って、痩せようとチャレンジしている姿が控えている。

スリム志向に関して、従来のフェミニズムの議論では、女性の外見を男性の側からの「見られるボディ」として議論してきた。さらに、女性が美貌を求めるのは、男性主導社会における女性に対する抑圧であるという議論が多かった。つまり、女性たちは、こうした男性主導社会によって縛られ、自らの身体を、男性の視線に応えるために、加工しようとしている。しかし、このスリム社会を果たして、男性主導社会による女性への抑圧の結果としてのみの視点で、読み解けるのだろうか。

「痩せ薬」ニュースの例のように、未認可のダイエット薬を購入して飲むのは、女性自身である。厳しい食事制限でダイエットしようとするのも女性自らの行動である。つまり、ダイエットやボディメイキングに関する態度は、抑圧による強制的な行動というより、女性たちが自ら進んで行っている実践である。ここには、従来のジェンダー論やフェミニズムの論説の視座からだけでは、うまく説明できない部分がある。本稿では、スリム社会を単に男性主導社会からの女性への押し付けとしてだけ読み解くのではなく、女性の側からのある種の能動的なスリム社会の受容の問題も視野に入れつつ、このスリム社会現象を読み解くつもりである。

次に、本稿の構成について説明する。「スリム＝美」という意識の形成は決して自然なものではなく、文化によって形成されたと考えられる。第一章では、まずスリムが賛美される近代社会の成立から、ボディメイキングの時代としての現代社会への流れを追う。第二章では、日本社会におけるボディと美しさのイメージについて論じる。第三章では、スリム志向社会に生きている女性ダイエッターの人生体験を探る。事例分析によって、女性がダイエットを行うきっかけは、異性と深くかかわっていることや、スリムと自己評価と深く関わっていることが分かった。

さらに、考察を通して、男性主導社会におけるスリム志向とは、女性が「綺麗になる」ことが、社会に受容されることである、ということがわかる。これは社会進出の面で、女性は男性と平等な立場に立っていないからこそ、生活

のレベルを確保できる男性と結婚できることが、重要なこととなっているからである。したがって、女性は自分或いは他者を評価する時に、しばしば男性の基準に頼るようになる。その上に、外見が評価標準として使われる傾向が生じるのである。しかし、事例によって呈示されたように、女性ダイエッター自身の立場から見れば、ダイエットを実行することは、男性からの抑圧というより、むしろ、社会における昇進の方法だと捉えられている。さらに、ダイエットを実行して痩せることは、女性が平等と自由を味わうチャンスを与えているということでもある。だから、女性はスリム社会に能動的に対応するのである。

第四章では、男性主導社会において、女性の身体がスリムであるべきだと体制化されながらも、女性は自らそのボディイメージを受け入れて、ボディメイキングを実践することについて分析する。この一見矛盾した構図を解明するのがここでの目的である。本章では、近年爆発な人気を得たボディイメージのビデオについて考察を加える。ボディメイキングにまつわる支配と被支配の関係、抵抗と快楽の構造、作り手と受け手の間に生じる共犯関係をカルチュラルスターディスの視点から解明する。この分析の結果、女性とボディメイキングの間に潜在する共犯関係を「エイジレスの神話」、「努力の神話」、「美が持つ権威性」に見出した。女性たちは、男性主導社会の文化が生み出した女性イメージに対して、それ独自の仕方を読み解き、自分たちの憧れているライフスタイルと結合させることで、それを自分のものとして楽しんでいるともいえるのである。しかし、それが女性の本来的な「解放」に結びついているかどうかについては、判断しにくい。ここでは、女性をめぐるポピュラーカルチャーを軸にして、支配・抵抗・受容の構図を描くことでボディイメージをめぐる文化の構図を読み解きたいと思う。

第五章を終章として、これまで論じてきた男性主導社会とスリム志向、女性とスリム志向の間における共犯関係をまとめ、結論を述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代社会におけるスリム化への志向をめぐって、この現象を文化社会学的視点から考察を加えたものである。

ダイエットやスリム化社会についてはすでにいくつかの著名な研究が存在している。しかし、従来のスリム化社会論は、主にフェミニスト研究の視座から、この現象を男性主導社会が女性に強制しようとする一種の抑圧の装置として分析するものがほとんどであった。本論文では、女性への抑圧としてのスリム化の強制という従来の視点を越えて、ある意味でスリム化の流れを積極的に受容している女性たちのおかれた社会的文化的文脈を明らかにすることで、この現象を読み解こうとするものであり、この点で、これまでになく新たな視点を提供したものと評価できる。特に、ボディ・メイキングにおいて、抑圧というよりも、むしろ、自身の身体のコントロールを通じて、ある種の「達成感」や「快感」を感じる女性たち（もちろん、その背景にも、女性たちを社会活動から排除する傾向の強い、ジェンダー化された現代社会の構造の問題が控えているのだが）の姿を描き出し、スリム化を求める社会およびメディアの動向と女性たちとの間に存在している一種の共犯関係を明らかにした点は、本論文の功績といえるだろう。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定した。